

「洗礼者ヨハネの誕生予告」（ルカ一章一〜二五節）

1 先駆者ヨハネ

今日は待降節（アドベント）、二番目の日曜日です。二本目の蝋燭に灯がともりました。今日も、救い主イエス・キリストが来られることを、私どもの思いの中心に置いて、礼拝をささげます。

救い主イエス・キリストが来られると申しましたが、これには、すでに来られたという意味と、これから来られるという意味と、二つあることは、皆さん、ご承知の通りです。

この「すでに来られたイエス・キリスト」はまさに福音書に伝えられています。「伝えられている」というより、証しされていると言ったほうがよいかも知れません。四つある福音書、これらはみな、弟子たちによって語られ、書き記されたものだからです。後に使徒と呼ばれる彼らは、イエスと生活を共にし、彼の言葉を聞き、その働きをつぶさに目撃し、その人となり、人格に直接接した。福音書は彼らの証し、証言以外の何ものでもないのです。

福音書ですから、ここには福音が書かれているわけですが。福音とは、良い知らせです。先週私どもが聞いたイザヤ書四〇章（九節）にも、「良い知らせ」という言葉が二度使われていました。バビロンからの解放が近い、神が国を再興し、共にいて、歩んで下さる、それは捕囚の民にとってだけでなく、イスラエル自身にとって喜び、福音でありました。

福音書には福音が書かれている。その通りです。しかしそこに書かれているのは実際はイエスです。イエス・キリストです。その言葉、その振る舞い、そのたたずまいを通してではあるけれど、イエスご自身です。つまりイエスが福音を語ったとか、何か良い知らせをもたらしたというのではないのです。たとえ福音であれ、よい知らせであれ、イエスが、自分と別の何かを提示したというのではないのです。イエスご自身が福音書の主題です。イエスその方が福音なのです。

とはいえ福音書はイエスを、生まれてから死ぬまで、いわば一つの伝記の形で書いているわけではありません。そこに書かれているのは、イエスがメシアとしての自覚をもって、神の国の宣教を開始してから、年齢で言うと、三〇歳から数年のあいだの出来事です。最後に十字架につけられて死んだ、しかしその三日後に復活した、そのイエスの歩みです。

ところでこの福音書の終わりはどうなっているかと言うと、マタイ、マルコ、ルカのそれぞれの福音書は、復活したイエスが弟子たちの目の前で天に挙げられる場面で終わっています。ヨハネによる福音書は、それとは少し違って、復活のイエスがペトロに現れて、「わが羊を養え」と語って、後の教会の働きをペトロに託すところで終わっています。

では福音書の最初はどうなっているかと言うと、四つすべての福音書、それぞれ描き方は少し違いますが、洗礼者（バプテスマの）ヨハネの出現、その活動を伝えるところから始まっています。

これに関連して思い起こすのは、コルネリウスという名の百人隊長の家でした。ペト

口の説教です。彼は、そこで、イエスに関わる出来事の全体を振り返って、こう言っています（使徒言行録）。

ヨハネが洗礼（バプテスマ）を宣べ伝えた後に、ガリラヤから始まってユダヤ全土に起きた出来事です。つまり、ナザレのイエスのことです（一〇・三七）。

なるほどイエスの出来事は、ヨハネが洗礼（バプテスマ）を宣べ伝えた「後に」起こったことです。しかしこの「後に」というのは、「それと無関係に」という意味ではありません。そうではなくて、むしろ「それにつづいて」という意味です。それにいわば必然的につづいてイエスの宣教が開始された。こうして洗礼者ヨハネは神の救いの歴史の中に位置づけられています。イエスに先駆し、その道備えをなしたのが洗礼者ヨハネです。

2 ザカリアの不信仰

四つの福音書とも、何らかの形で洗礼者ヨハネについて語るところから始めていますと申しました。

それには違いないのですが、もう少し詳しく言えば、ルカによる福音書は、他に比べて独特です。

他の福音書がみな、ヨハネが活動を開始した、したがって年齢的にもイエスと同じぐらい、三十歳近くになってからのヨハネのことを書いているのですが「例えば最も重要なもの一つとして、このヨハネからイエスが洗礼（バプテスマ）を受けたというようなことですが」、ルカによる福音書は、まさに今日の私どもの聖書がそうであるように、彼がヨルダンの低地、荒れ野で活動を開始する以前、いや生まれる前からのことを書いているのです。そこから書き起こしているのは、ヨハネが、神の救いの歴史に、イエスの出来事に深く関わっているということなのです。彼も神の救いの目的のために選ばれ、召された人なのです。

洗礼者（バプテスマの）ヨハネ、この名を聞いて、私どもが最初に思い浮かべるのは、その生活ぶりです。住んでいたのは荒れ野です。要するに人の住まないところです。聖書には、らくだの毛衣を着、腰に革の帯を締め、いなごの野蜜を食べていたとあります。彼がしていたのは、来る人来る人に悔い改めを迫り、その悔い改めのしるしとして洗礼を授けていたのです。その強いメッセージに引かれてきたユダヤ人はユダヤ全土に及び、その中には、徴税人や兵士もいたし、中にファリサイ人やサドカイ人もいたとあります。たださすがに彼らは「蝮（まむし）子らよ」言って追い返されています。

いずれにしても、こうした成人してからの洗礼者ヨハネのことを考えると、彼が今日の箇所が私どもに示しているように、敬虔な祭司を父に持ち、母もまた由緒ある祭司の家系の出であったと聞くと、半分驚くと共に、半分は納得、というような思いにもなります。

今日の箇所で、洗礼者ヨハネのことは、天使のお告げの中で、その一端が、予告として形で語られているにすぎません。父と母の話が中心になります。ザカリアとエリ

サベトです。

二人とも神の前に正しい人で、主の掟と定めをすべて守り、非の打ちどころがなかった。しかしエリサベトは不妊の女だったので、彼らには子供がなく、二人ともすでに年をとっていた（七節）。

これを読むと私どもは、先月まで読んでいた創世記、アブラハムとその妻サラのことを思い起こします。

しかし旧約には、そうした中で、奇跡と言ってもいい、神の特別の働きによって子を産むことになった人が多く出てきます。イサクの妻リベカ、ヤコブの妻ラケル、時代はくだってエルカナの妻ハンナも同じです。このハンナの子が先見者（預言者）サムエルです（サムエル上一章）。

こうして並べて見ると、洗礼者ヨハネの誕生から始まり、イエスの宣教へとつづく救いの歴史は、人間の営みの、人間の、いわば世直しの思いの延長線上に起こったのではなくて、神の救いのわざとして開始されたのです。神の働きがすでにここで始まっています。

今日の箇所が示しているように、ヨハネの父祭司ザカリアが、「主の聖所に入って香をたく」という務めを果たしているとき、突然主の天使が現れて、妻エリサベトは男の子を産むと告げられます。

天使の言葉を聞いたザカリアは、最初恐怖の念に襲われます。少し落ち着いた彼は天使に問うのです。わたしも妻も老人で、ここまでは事実ですが、言外に、そんなことはあるはずはありませんという思いがあったのでしょうか。「何によつて、わたしはそれを知ることができるのでしょうか」。ザカリアは、確認となるしるしを求めます。

創世記、アブラハムの生涯を追ったとき、これに類する言葉をアブラハムもサラも何度も口にしたことを思い出します。しかし彼らは、その不信仰を問われるというようなことはありませんでした。しかしここでは、ザカリアは天使に「時が来れば実現する言葉を信じなかった」として、「口が利けなくなり」、話すことを奪われてしまふのです。どこに違いがあったのか、直ぐには分かりません。根本のところではアームンと言つて神の約束を、神の言葉をそのまま受け入れなかったということがあったのだと思います。つまり、そのまま賛美すべき時が、私どもにはあるのだと受けとめておきたいと思えます。

3 証人としてのヨハネ

ザカリアは、お告げを聞き、不信仰な反応をみせましたが、妻エリサベトは、そうではなかったようです。

というよりも、夫ザカリアが口が利けなかったので、男の子を産むという天使のお告げを、そもそも知らなかった可能性があります。

ですから身ごもったことは、突然のことと思われたでしょう。その驚きと喜びが今日の箇所の最後の彼女の言葉に表れています。確かに神は彼女に「目を留め」（二五

節) てください。この驚きと喜びとは、更にイエスの降誕にまでつづきます。驚きと喜びが子どものクリスマスでもなければなりません。

洗礼者ヨハネに関する天使のお告げそのものについては、先ほど触れることをしませんでした。予告にすぎないとしても、洗礼者ヨハネとはだれか、知るために、その一部に目をとめたいと思います。

イスラエルの多くの子らをその神である主のもとに立ち帰らせる。彼はエリヤの霊と力で主に先立って行き、父の心を子に向けさせ、逆らう者に正しい人の分別を持たせて、準備のできた民を主のために用意する(一六〇―一七節)。

これは旧約のマラキ書を踏まえた預言です。分かりにくいところがありますが、一言で言えば、救い主、やがて到来するイエス・キリストに先だって、道ぞなえをする人だということです。イエスを指し示す、イエス・キリストの証人、そこに彼の人生の意味があります。

これに関連して今日は、最後に、証人としての洗礼者ヨハネの姿を、有名なイーゼンハイムの祭壇画キリスト磔刑図に見たいと思います。

描いたのはマティアス・グリューネヴァルト(1470/75-1528)というドイツ中世の画家です。

現在は、フランス、アルザス地方のクルマルという町にあるウンターリンデン美術館にあります。もともとはこの近くのイーゼンハイムにあった聖アントニウス修道院のために制作されたものです。中世の修道院は病院をかねたところが多く、伝染病、梅毒などで療養している人たちの慰め、信仰の励ましのために、描かれたもののように、三重の観音開きになっていて、一つ開けば、降誕図や、復活図などが描かれていて、日によってまた季節によって画面が交替し、人々はそれを見ながら、イエスに望みをたくしていたのです。縦二〇三メートル、横五〇六メートルのひじょうに大きなものです。

今日、私どもが目にしたのは、この絵でも、十字架の右下に立っている、これが洗礼者ヨハネです。この中でも、とくに、長く大きく描かれた洗礼者ヨハネの右手の注目してください。この人を見よ！ヨハネの存在全体をこの指が現しているのです。指の後ろの暗い画面に描いてある文字は、ラテン語で、「あの方は栄え、わたしは衰えなければならぬ」(ヨハネ三・三〇)です。これこそが証人というものの在り方にほかなりません。

興味深いのは、これは数年前宮田先生の書物で知ったのですが、右手の人差し指以外の指で、もともとは特殊な絵の具を挟んでいた、という説です。結論は出ていないらしいのですが、もしそうであれば、この洗礼者ヨハネは、この画家、グリューネヴァルト自身でもあるということになります。

グリューネヴァルトは、自分はその画業をもってイエス・キリストを証しする、洗礼者ヨハネの指にすぎないという信仰の告白をここに描き込んだことになりました。教会も、そして私どもも、許された人生を、ひたすらイエスの証人として歩んでいきたいものです。

(二〇二〇・一一・六)